

バランススタイル 事前教材レジュメ

バランススタイルの治療とは？

背景 開催理由

背景 陸上競技

最初から繁盛していなかった ⇒人間観察 ⇒患者心理/患者評価

三軸修正法 28年間 毎週宿題 天才ではない感性 言語化能力

「簡単に治す」より追求したのは「患者評価を上げる」こと

1時間5人の自由診療 6分のルーティン+6分の強調主訴

セミナーでは7分間のルーティン指導になります。

ゴール

○7分ルーティン + 7分強調主訴の展開とスピードを理解

精度よりスピード会得 /応用より基本の型

○治療構成の本体を身につけ、個性の強調主訴を活かす

○短い時間で長く治療をしてもらった感覚を提供する

治療分析

ルーティン + 強調主訴 6:4 を理想

ルーティン = 全身接触+診断 誰にでもどんな状態でもやる一連の施術

強調主訴 =主訴+ニーズ+違和感(患者の気づいていない所)に集中した施術

治療とは

感情を変化させること ×不機嫌⇒喜び ○興奮⇒落ち着く

1、関節圧着 2 過労部位のDマッサージ 3 力学的構造(力×半径)

4 患者心理(人間観察)

治療の奥義

一体化 患者さんが気づいていないことを解る事

診断の元になるもの

西洋医学診断、東洋医学診断、経験値、三軸的思考と構造、生命先達へのリスク、診断=治療、立体の構造、患者さんの満足、圧力の緩和、筋肉の大きさ優先、関節の大きさ優先(力のモーメント)、患者心理の変化、同側性の一致、骨関節と筋肉の二層で診察、温冷について、

タッチ

患者さんが評価してくれる最大のもの

極タッチ 4分割タッチ 全身を触診するタッチ 手数最少

押す方向 接線面に対して直角、痛くない方向、痛い方向

点と線と面(指と関連診断と手の平)

関節の圧着

関節面の接地面積最大 多方向から圧力 + ゆっくり離す

筋肉起始停止の走行にアライメント

力の伝達を良くする

Dマッサージ

5/5→4/5で止める、ゆっくり離す

書道的止め

疲労過労 職業病 電気治療併用

力学的構造

楽な姿勢と良い姿勢

外転位をさせない

力のモーメント $M=Fr$ 力×半径

地面に近い下位ほど固定重視、上位ほど自由重視(立位)

前後左右捻じれの三軸 立体のバランス

患者心理

落ち着かせる 傾聴+リズム合わせ+ゆっくり呼吸

効果より印象

効果より信頼

能動的予約か受動的予約の希望なのか

患者重症度と診断の一致

体感時間管理

短い施術時間であること前提
四肢をきちんと治療できる事
施術者の気持ち安定していること
山と谷の差 早いだけでは×
全身を網羅すること 四肢は絶対
気づいたことを伝える事 感覚ボイスと命名
呼吸が楽になること 脳の活性、気分の改善
「ゆっくりはやく」の動作さばき
患者さんが共感納得すること
患者さんがリラックスすること タッチ

痛みとは

圧力 f/cm^2
脳が痛みを感じる、気分機嫌が痛みを作る、個別化/一体化、「まだ痛い」
酸欠症状、ストレス、運動不足が原因 (眠い、だるい、動きたくない)
固定部位から可動部位へ痛みを移動させる

治療の必須箇所

足首 + 股関節腰 + 首 腰と膝は一体関連 例) ブルブルマシン

花谷が治療中に意識していること(いつもではない)

- 1、Weights is underside
- 2、4分割タッチ
- 3、へその緒 一体化
- 4、患者さんの呼吸確認
- 5、遠方位の筋肉を使う
- 6、手数最少
- 7、治療はSEX
- 8、フュージョン 一体化
- 9、山と谷の差
- 10、歩数の最少化
- 11、足裏(踵)の接地
- 12、攻撃治療
- 13、誘導治療 yes-set リラックス 現状変化未来
- 14、診察時間管理 全体利益>個別利益

- 15、興奮管理
- 16、鼻息口臭腋臭管理 息を止める
- 17、患者さんが気づいていない悪い場所を感じる探す
- 18、気になったことは伝える
- 19、不必要な話、天気の話をしてしない

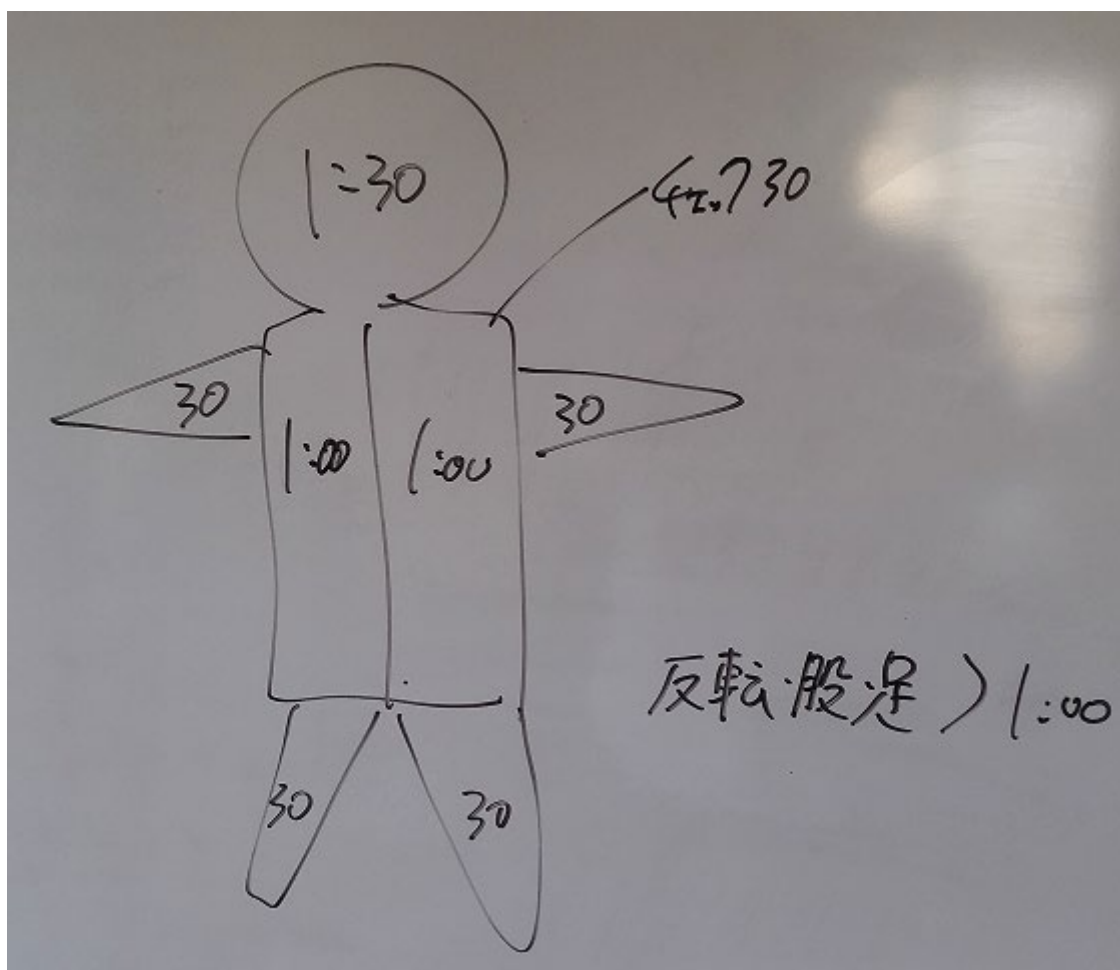
魅せる治療のつくり方

- 1、絶対味方になる
- 2、一体化フュージョン
- 3、疾患ではなく、人間の感情の変化を注視
- 4、主導権確立 患者の主訴 < 自分の判断 環境の安定化、縦関係
- 5、すぐ切る態度がとれる 強い態度/自信と過信
- 6、承認欲求を満たす
- 7、山と谷の差の最大化
- 8、患者さんが気づいていない所を有言、無言でいじる
- 9、痛みの活用 痛みにより痛みを消す /痛みがなくなる体験 /激痛を作る
- 10、患側と健側の差
- 11、右側と左側の差
- 12、見えないモノを伝える 背中での管理
- 13、オーバーリアクション
- 14、書道的丁寧さ はいり、とめる、はねる、はらう
- 15、解っている風を演じる 見切っている態度 余裕な態度
- 16、治療より診断重視、予後重視 現状変化未来
- 17、治療終了時点でピーク
- 18、丁寧に診断確認をしている態度 現状変化未来
- 19、個別感の演出 一体化感 フュージョン
- 20、タッチが柔らかいこと 間を置くこと
- 21、内臓の診断ができる
- 22、カウンセリングができる 心の相談
- 23、患者さんの想像を超える演出
- 24、矯正音を出すこと
- 25、「大丈夫」を言い続けられるタフさ
- 26、書き換え、リフレーム
- 27、優しい嘘
- 28、名前を3回言う

クロージング

- 1、魔法のクロージングワード ⇒ 「パーフェクトクロージング」
- 2、嘘でも相手が認めなくても、回復していることを伝える
- 3、興奮している患者には落ち着かせる ゆっくり話をさせる
- 4、患者さんからの評価重視こそ × 自己慢
- 5、3回を4回 5回は流す 放流のスタンス
- 6、無理に困わない
- 7、他のへボ治療院に行くよりいい
- 8、診断(自己判断)で来院回数を決めていく
- 9、治療後、患者さんのことは一切思い出さない

「怖い決断」と「正しい努力」



<資料>

7分ルーティンは治療ではなく診断

- ・全体、場を診る
- ・人間作りから（寝る食べる動く）
- ・腸脛靭帯は痛いので強く押さない
- ・その人の楽な位置に四肢を戻してあげる。膝を曲げて良い位置は「手を放しても安定するところ」
- ・ファーストタッチに雑さを感じさせないようにする、治療初めの臀部のファーストタッチが重要（上外1/4から）。ファーストタッチが坐骨結節はNG
- ・腰椎1.3.5.2.4は各2秒くらい押す。L5は方向を作って押す。（斜め下、足下、へそ下）
- ・頰椎を触る時の枕の位置修正
- ・力の分散を防ぐため、治療中はなるべく踵を上げない、遠位の筋肉を使うなど体全体で力を出していく
- ・頰椎調整時のフェイスペーパーのシワの差が技術力の現れ
- ・頰椎調整時に、苦しいので頰椎動脈を触らない、
- ・相手の体を振るようにマッサージしない
- ・手のひらの面を使って押す、指先はチェック
- ・手数は患者さんにとってストレスになる、治療の手数=患者が受けるストレス
- ・主訴と+1を見つける。
- ・治療家は施術中の力の分散を防ぐため、ジャストサイズな靴のほうがいい
- ・治療中の歩数を減らしていく。施術時間の早さ=患者からの信頼
- ・押すときは逆側に添え手をする(力を分散させないため)
- ・相手の服を直す（スタート時のシャツ、足関節整復後の裾）
- ・相手の楽な位置に四肢を置く
- ・治療の中で自分を落ち着かせるための時間を確保する
- ・治療の移動を静かに早く動く（ゆっくり早く）
- ・力が逃げないように押している方と反対側を支える
- ・患者の体が極力動かないような方向に力を加える
- ・相手に鼻息がかからないようにする
- ・相手の皮膚の可動域を考えて振り幅を調整する
- ・体勢を移動させる際は手で誘導する、仰向けをはさむ等わかりやすくする
- ・仰向けやうつ伏せになった時、患者にとって最も楽な肢位を、治療家の都合で変えない

- ・患者への関心が強すぎるが故に、顔を近づけすぎない
- ・治療中、手が前後に動いたら、身体も前後に動かす。
- ・（足首、肩関節整復時の）牽引を行う時は手先ではなく、腰で引く
- ・鍼灸師でなくても、ツボの場所は知っておく。主要なツボはすべて触る
- ・リンパを鼠蹊部や脇へ流すイメージを持つ
- ・治療の最後で主訴を触る。最後の印象が全て
- ・体位変換は少なく
- ・前足に力が入れば強い治療になる
- ・早いからこそ結果が出る